

## デザイン社会学（デザイン環境論）ケーススタディー6

国際デザインフェスティバルと大阪〔その2〕

# Designale, what?

西尾直

### ◆はじめに

デザイン社会学（デザイン環境論）ケーススタディ（1）にとりあげた〔国際デザインフェスティバルと大阪の10年—大阪芸術大学紀要 No.14・1991年〕の中でこの国家的行事と大阪のデザイナーたちとの微妙なかかわりに多くの紙数をさいたのは、この行事の大阪恒久開催を契機とする新たな局面の展開を、大阪のデザイン界に期待したためだが、その文中では別稿に譲ったデザイナー側のアクションのひとつとして、デザイナーとこの行事とを組織的に結ぶ唯一の接点となったのが「デザイナーレ・Designale」である。

1983年以降、隔年開催の国際デザインフェスティバルにおける地元デザイナーの自主的なプロモーションとなったデザイナーレは、大阪のデザイン界によりやく一定の位置を確保したかのようにも思えるのだが、しかし、最終的な目標と現状における平均的な認識との誤差を含めて、必ずしもデザイナーたちの生産的な合意に支えられているわけではない。このことは、いかにも複雑な成立と性格を物語っているのだが、少なくとも、過去12年7回の実績を重ねたデザイナーレの意味とその評価を、ひとまず総括しておきたいと考えている。例によって本論の目的は、デザイン社会学の視点からこのプロモーションの地域デザイン環境における構造的配置や、その作用を分析する試みであり、いわば「地域とデザイン」がテーマだから、デザイナーレ一回毎の具体的な内容や経過を追うつもりはないのだが、はじめにこのプロモーションの舞台となった国際デザインフェスティバルと大阪の関係を、あらためて大まかにふり返っておく。

### 第1章 1980年代初頭、大阪

#### ◆国際デザインフェスティバルと大阪

構想段階では、国際産業デザインビエンナーレと呼ばれたこの事業は、1980年代を前に深刻化した貿易摩擦や高度情報化へ向う構造的変革を迫られた日本経済に対する通産省の産業政策の一環として、デザインを通じたわが国産業界の文化的貢献を世界にアピールする企てであり、同時に従来のデザイン行政には見られなかったデザイナーを直接対象に含んだ画期的な政策でもあった。

この事業の運営主体となる財団法人国際デザイン交流協会（Japan Design Foundation 以下 JDF）が基本財源の半額を出資した大阪を本拠として正式に発足したのは、有力な誘致運動の末、大阪における恒久開催が決定してわずか4ヶ月後の1981年11月だが、言うまでもなく、こうした政府主導による国際的行事には、開催地の何れを問わず地域性のかかわる余地はなく、国家的見地がすべてに優先する。発足当初のJDFがしばしば見せたそのことへのナーバスな姿勢は、とりわけ前例のない文化的行事を扱った通産省の緊張を物語っている。

国際デザインフェスティバルを構成する三つの事業のうち、国際デザインアワードと国際デザインコンペティションには、回を重ねて蓄積された一種の権威に対する評価が、多分に抽象的とは言え国際的には既に定着したと言ってもよい。

これらは、その性格上、地域性とは本来無縁の事業なのだが、例えばコンペティションの応募者が、1回平均60カ国を超える現在、継続する一定の評価が国際社会に

おける大阪の知名度に、大きな効果を上げているとすれば、実際にはそれがデザインを通じた限られた範囲であったとしても、かつての大阪との比較においては「新たな局面の展開」であり、開催地メリットのひとつと言えなくはない。しかし、それだけではなく、1980年の暮れから81年にかけて、当時の大阪市長大島靖を中心に行政と財界がスクラムを組んだ強力な誘致運動の目標は、明らかに三つめの事業である国際デザイン展の開催を指していたのである。

前記二事業における成果や資料の公開展示を中心に、わが国産業界のデザイン活動とその業績を紹介するこの催しが、東京ではなく大阪で開催されることの是非は、既に論議し尽くされているのでここでは省略するが、少なくとも大阪側の期待には、長期的な継続行事としての地域への波及効果の方に重点があったはずである。

市政100周年を間近に控えた1980年代初頭の大阪では、行政と産業の枠組を越えた地域を単位とする情報環境の整備を基盤に、新たな都市像の創造を目指す長期的、継続的プロモーションとして構想された大阪21世紀計画がほぼ時を同じくしてスタートしている。

全世界を対象に、隔年毎の恒久開催をうたった国際産業デザインビエンナーレが大阪の官財界の注目と関心を集めたのは、まさしく21世紀計画の象徴にふさわしい国際性・文化性と、そしてこのタイミングであった。

JDFの発足に先立つ準備委員会の開設にあたって、大島靖市長が自ら掲げた「大阪ビエンナーレ準備室」の大看板には、4億円の出資金を上回る効果を見積ったその思い入れがこめられていたのだが、しかし前述したような国家的行事の大義名分を無条件に優先するならば、言い換えれば、大阪の役割が開催地名義と場所の提供以上の何物でもないとするれば——仮にそうであったとしても、大阪への有益性には変りはないのだが——少なくとも最初の見積りには大幅な修整が必要であった。

デザイナーを含めた大阪のデザイン関係者の間に、一時期たしかに見られた昂揚した緊張感が、準備作業の進捗と共に次第に鎮静化したばかりか、その多くが無関心な傍観者に一変した現象もそのひとつであろうし、また「大阪ビエンナーレ」という略称にいたっては、もはや

人々の記憶に残ることすらない。

#### ◆国際デザインフェスティバルと大阪のデザイナーたち

これらのことは、行政と財界関係者による誘致運動の過熱に始まった大阪と国際デザインフェスティバルの関係が、開幕を前にしてようやく正常化したと考えれば、その通りなのだが、一方、通産省としては初めての、そして大阪デザイン史上では最大の、この国際的デザイン行事の大阪誘致にあたって、本来は当事者であるはずの大阪のデザイナーたちが、個人的にはともかく、公式には一切関知しなかったばかりか、その呼びかけすらなかった厳しい現実を思い起してほしい。

客観的にはきわめて興味深いこの事実は、しかし、それに対するデザイナー側の意識や組織の問題よりも、社会的な評価の意味で、デザイナーの位置づけを自覚する否応ない機会ではなかったか。

とは言え、このことに対してデザイナー側に不満や異議があったわけではなく、むしろ結果的には資金と労力の両面で何ひとつ負担することなく、デザイナーたちはこの行事をある意味で手に入れたと言えなくもないのだが、誘致運動をリードした人々が、デザイナーに期待した役割が実施段階における奉仕的作業（のはず）だったのは、それがかつての行政主導型デザイン振興事業におけるひとつの定型だったからである。

しかし、この事業に関する限りデザイナー側の姿勢はそれ以前の思惑、いわば善意の傍観が既に大勢を支配していたと言ってもよい。彼等の暗黙の合意を決定的にした東京中心の「お上の仕事」というこの行事の基本的な性格に対する固定化した認識は、先に述べた通産省のタマエと大阪のホンネのずれとは異質な、本能的とも体質的とも思える傾向なのだが、だからと言って彼等がこの行事の価値や、大阪と大阪のデザインに対する意義を認めなかったわけではなく、ただそれらが自らの利害に直結する何物もないことを確認した上の無関心であり傍観であった。

それはむしろ、現代社会の一般的な風潮とも言えようが、しかし、将来的な公共利益を前提とした社会投資の意識ないし意欲とは程遠いこうした姿勢が、多くのデザイナーに共通する死角であったことは事実であろう。

このような国際デザインフェスティバルをめぐる大阪誘致から開幕への起伏に富んだ2年の間に、大阪のデザイナーたちには「地域とデザイン」という多分に抽象的だが今後の宿題としてはきわめて重要なテーマを与えられていたのだが、結果として、その間のデザイナーたちの姿勢に示された解答は、この課題の見送り、もしくは結論の先送りであった。

#### ◆JDF と USD-O

ここまで述べてきた「大阪のデザイナーたち」とは一定の枠組や組織を指しているわけではなく、こうした流れに対する見方と同様に、あくまでも一般論だが、実際に大阪のデザイン団体を単位とした動きにも国際デザインフェスティバルへの組織的な対応は、二、三の例外を除いてほとんど見られなかったと言ってもよい。

大阪のデザイン団体に共通した慎重な、と言うより消極的な姿勢は、前項に述べた全般的な傾向を裏付けていたのだが、大阪のデザイナー社会を代表する意思表示という意味では、大阪に拠点を持つ16団体が結成した大阪デザイン団体連合（United Societies of Design, Osaka 以下 USD-O）が当然その窓口になるはずであった。デザインを通じた地域社会への貢献を目標に、1981年10月、JDFより一足早く発足した USD-O が、当初国際デザインフェスティバルに対して具体的な行動を起こさなかったのは、この組織の基本的な性格として、デザイン団体を統轄した特定の事業や運動を独自に推進する機能と権限を備えた事業体ではなく、したがって、活動主体である構成団体それぞれの意向を忠実に反映した結果に他ならなかったからである。

しかし、やがて開幕を間近に控えた「国際デザインフェスティバルと大阪のデザイナーを組織的に結ぶ唯一の接点」としてデザイナーレが名乗りをあげるのだが、後述するそのキッカケはともかく、それは単に依然として低調な国際デザインフェスティバルに対する関心を高めるといった、JDF への協賛活動の意識よりも、その前年、1982年11月2日 USD-O を主体に開催された「デザイン会議 大阪」のテーマ「デザインは明日の大阪を創る」を伏線とした意志の継続が基点にあって、それはまさしく「地域とデザイン」に対する意欲的な取組みの表れであ

り、USD-O 本来の目的を自覚した上の必然的な欲求と言えるかも知れない。

一方、国際デザインフェスティバルに対する協賛名義などの形式的な手続きを除けば、JDF が USD-O を通じてデザイナーたちへの正式な働きかけを試みたのはデザイナーレ構想が煮詰った段階からと言ってもよいのだが、それは開幕を前にしてなお低調な地元デザイン界の空気や USD-O の動きを安易に見過していたためではなく、実際には、スタッフのほとんどが初めて経験する不馴れな、しかも膨大な業務に追われる JDF としては、少なくとも予想とは大きく外れたデザイナー側の思惑を測りかねていたのが実情であった。

#### ◆木村一男私案「国際デザイナーズデイ」

しかし、開幕へのカウントダウンと並行して、JDF 常務理事・事務局長木村一男を悩ましつづけたのは、関係者の間の話題にのぼり始めた地元の無関心な姿勢とその対策であり、とりわけ積極的な一部財界人の再三にわたるつきあいは、デザイン界に対してよりも JDF の地元対策にその鋒先が向けられたのである。

JDF 役員中唯一のデザインプロパーであった木村一男もこの当時はまだ、大阪デザイン界とのパイプはさほど強力ではなく、したがって後にデザイナーレの下敷きとなった〔国際デザイナーズデイ〕の企画も、彼が半ば個人的なルートを頼りに試みた地元対策のうちのひとつであった。

国際デザイン展の会期中に、国内外のデザイナー・デザイン関係者のための特定日を設け、出展企業の協力を得て時間外に会場を開放し、各種のイベントやパーティを催すというこの種の企画が、初めから展全体のプログラムに盛り込まれていなかったこと自体、意外にも思えたのだが、その結果“国際”とは言うものの海外からの有力デザイナー、特に国際デザインアワードやコンペティションの受賞者たちの参加は、すでに決った日程上不可能であり、しかも、予算措置のないこの企画の必要経費として予定した10,000円程度の有料参加者300人以上を動員する見込はきわめて悲観的であった。

木村一男がこの企画への協力を USD-O に正式に申し入れるのではなく、すでに開幕が三カ月後に迫った国際デ

ザインコンペティション審査会のレセプションの席上で、私的な相談として USD-O 側に持ちかけたのも、こうした前提をふまえた上のことだが、それは地元対策の立ち遅れと言うよりも、それ以上にデザイナーたちの反応に対する JDF 側の不安の大きさを物語っていたのである。たしかに当時の大阪デザイン界の動きは、名目はどうであれ JDF に対するざっと 300 万円分の協力を期待できる雰囲気ではなかったと言ってもよい。

ごく常識的な企画と思えた「国際デザイナーズデイ」の開催に対して、木村一男が JDF 独自の推進を逡巡していた背景はこうであった。

### ◆デザイナーレの成立

一口に言えば、こうして一時は暗礁に乗り上げたかに見えた「国際デザイナーズデイ」木村私案と、前項に記した USD-O 有志たちの目論見 地域社会とデザインを結ぶプロモーション構想 との合流が、第一回目のデザイナーレ 83 を生み出したのだが、この過程をふり返って、デザイナー側の自主的な企画・運営を買って出た有志たちの提案は、そうでなければデザイナーたちの協力を期待できなかった JDF には、まさしく「渡りに船」であった。

一方、有志たちが前出のデザイン会議—大阪—のテーマ「デザインは明日の大阪を創る」意識の継続をプロモーション活動に展開するための第一歩として、大阪デザイン史上最大の行事となるはずの国際デザインフェスティバルとの間に、組織的な接点をひとまず確保しておくことは、見通しも定かではないこの時点で、唯一具体的な前進であり、しかも、この行事をめぐる人・物・情報の流れを今後効果的に運用するための、きわめて有利な橋頭堡とも言えるのだから、この段階では双方の利害が一致していたと言ってもよい。

しかし、こうして当面した現象に対する多分に表面的な合意が、両者間の本質的な理解への重要なプロセスやこの時すでに抱え込んでいた矛盾を見落したか、あるいは軽視した原因ではなかったか。この矛盾とは、またしてもタテマエ（国家的見地）対ホンネ（地域メリット）というデリケートなギャップの形を変えた再現であった。

もとよりデザイナーレが、国際デザイン展の大阪における恒久開催を基点とした構想である以上、この行事に

集う国内外のデザイナー・デザイン関係者の交流イベントの盛り上がりによって国際デザイン展とその関連行事の活性化に華を添える、いわば、この行事におけるホスピタリティの役割を、デザイナーレに期待する JDF のタテマエに譲歩の余地はない。このことと、地元大阪を意識したデザイナー側の自主的な意思表示との生産的な両立が、デザイナーレ成立の基本的な前提であり、その後もついて回る課題とも、時には泣き所ともなるのだが、少なくとも最初のデザイナーレに関する限り、有志たちの主張（ホンネ）に、具体性と説得力を欠いた理由は、この時点において彼等の立場が、必ずしもデザイナー側の代弁者ではなく、実際には JDF との間に立って、生産的な両立はおろか双方との妥協に終始したためであった。とりわけ、度々述べたデザイナーたちの消極的な反応は、むしろ受身に回った JDF との調整よりもはるかに微妙な緊張を孕んでいたのである。

デザイナーレを提唱した有志たちが USD-O 内部においてさえマイノリティであった事実は前章に明らかだが、彼等の最大の誤算は、多くのデザイナーたちが必要以上に意識した JDF への、言い換えれば行政サイドへの奉仕的協力活動というデザイナーレに対する一方的な先入観であった。例えば USD-O が正式行事としての承認を見送ったのも、予算を持たない JDF に対して、デザイナー側が何故それを負担するのかという、短絡な反発以外に正当な理由はなかったはずである。しかし、こうした反論への解答は、国際デザインフェスティバルをめぐるこの 2 年間に、広くしかも根強く沈黙した大阪デザイン界の屈折した空気が、唯一の組織的行動となったデザイナーレに直接反映した不本意な現象を含めて、この国家的行事と大阪の関係に対する不定な認識の修整が先行する難題であり、少なくとも限られた 3 ヶ月の時間では絶望的な作業であった。

とは言え、USD-O がこの構想自体を全面的に否定したわけではなく、実質的な準備作業や会員団体を通じた参加呼びかけには、事務局機能を動員する非公式な支援態勢を整えてはいたのだが、こうした背景を承知の上で、ひとまず「開催の可能性」を最優先する選択を迫られたデザイナーレ 83 が、明確な主張もなく、散漫な印象を

残したとしても、それを安易な妥協の故と決めつけるわけにはいかないように思えるのである。

### ※デザイナーレの名称について

デザイナーレ (Designale) とは、1982 年春 JDF 審査・総合企画両実行委員合同会議で、当初の国際産業デザインビエンナーレに替る事業の総称または愛称としてノミネートされた名称であり、その後「正しい英語ではない」という通産当局からのクレームでキャンセルされた曰くつきだが、国際デザイナーズディ木村私案を引き継ぐ際、使用承認を得たネーミングである。一般市民を含めたデザインの祭典を想定した発想からローマ時代の Bacchanale (酒神 Bacchus に因んだ、ぶどうの収穫を祝う祭) に由来している。

## 第 2 章 デザイナーレの起伏をふり返る

### ◆デザイナーレ大阪コミッティの意味

デザイナーたちの期待と戸惑いの中で、デザイナーレが最初の幕を開けたのは 1983 年 11 月 4 日、大阪城ホールのはぼ全館に展開された第 1 回国際デザインフェスティバル 13 日目の夕刻だが、デザイナー側に一任された、と言うよりは、デザイナーレを提案した有志たちの構想をそのまま組立てたこの日のプログラムは、当然のこととは言え、大阪が主役であった。タテマエとしては多分に不本意なはずの JDF が、これに口をはさまなかったばかりか、会場の時間外無料開放をはじめ、デザイナー側の要望をすべて受け入れた理由は、前章に述べた木村私案の心積もりがあったためだが、むしろ優先したのは、デザイナー・デザイン関係者の参加 400 人以上の保証だったかも知れない。必ずしも万全の信頼を受けていたわけではないこの国家的行事の大阪開催が、一定の評価を期待する上で「地元デザイン界の盛り上がり」というフレーズを加えることは、決して無意味ではないからである。内容としては、比較する対象が見当たらないという意味でのオリジナリティこそ認められるものの、十分な準備期間を、とりわけ地元デザイン界における共通認識の確認に必要な時間を与えられなかった最初のデザイナーレにそれ以上を求めようとも思わないが、しかし、実際の運営に際

して早くも兆した JDF のタテマエ重視姿勢とデザイナー側の意思表示との小さなズレ違いは、前に指摘した通り、双方の生産的両立への取組みを棚上げしたままの必然的な、そして宿命的な現象とも言えようか。したがって、デザイナーレ 83 の成果をとり上げるとすれば、USD-O の存在意義を JDF が改めて認めたこともそのひとつだが、その後の展開に有力な伏線となったもうひとつは、事業主体 (主催者) となる「デザイナーレ大阪コミッティー以下コミッティと略す」の編成である。

国際デザイン展 83 に含まれる一プログラムとしての実施を断念した JDF と、全構成団体の同意を得られなかった USD-O のそれまでのいきさつは前章の通りだがこのコミッティの編成は、しかしそのための応急処置ではなく、あくまでも全大阪を対象とするデザインプロモーションへの将来的拡大を意図したデザイナーレ構想の最も重要な布石であった。

85 年、第 2 回国際デザインフェスティバルを前に、JDF から USD-O への正式文書によるデザイナーレ開催要請に応えた大阪の 16 デザイン団体が、デザイナーレを恒例の公式行事として承認後、前回の個人単位から JDF、USD-O に財団法人大阪デザインセンター (以下 ODC) を加えた三者構成による体制を整えたのは、この構想の具体的前進であった。

この編成は、前出のデザイン会議—大阪—における前例にならった非公式な任意組織だが、しかし USD-O にとっては単にデザイナーレに関する便宜的な協力体制に止まるものではなく、むしろそれ以上に、USD-O が活動目標に掲げた「地域デザイン環境の整備」に不可欠な行政諸機関との、とりわけその接点にある振興機関としての JDF、ODC との日常的な連繋協力関係を強化するための戦略的配置のひとつだったのである。

### ◆記念講演会を加えたこと

前述したように 85 年の第 2 回からデザイナーレを恒例の公式行事としてとりあげた USD-O は、コミッティの下部組織となる実行委員会を編成して企画実行を推進する態勢を整えたのだが、だからと言って、国際デザインフェスティバルもしくは JDF とデザイナーたちとの距離が一気に接近したわけではなく、新たなプロモーションメデ

シアへの発展機運が高まったわけでもない。しかし、国際デザイン展のいわゆるウエルカムパーティとは本質的に異なるデザイナーレの主張として、大阪デザイン界の意志を表現するステージの確保が、少なくともこの時点で言えばその土台づくりが、最低限必要な条件であった。

交流イベントに加えて国際デザインアワード受賞記念講演会をセットした二部構成は、このことの対策に他ならなかったのだが、イベントとしての対外的な訴求はともかく、デザイナー側の自主的な意思表示とは無縁なこのプログラムが、むしろその範囲を限定したかのような印象を人々に与えたのではなかったか。

1985年10月24日、この年から会場をインテックス大阪に移した国際デザイン展第2日目、デザイナーレ史上最多の1,000人以上が参加したデザイナーレ85の大成功は、記念講演会を含めたプログラムの充実よりも、明らかに交流イベントのホスピタリティ効果に対する評価であった。この日、世界各国から来阪したアワード・コンペの受賞者たちを交えた多くの人々の実感は、個々の実質的な交流と共に、インテックスプラザの広大なスケールと、ダイナミックな企画が演出した直接的、具体的な刺激と感動の共有であり、それらは、抽象的な理念や観念の交錯をはるかに圧倒する強力な印象を残したのである。

#### ◆先行するホスピタリティ

デザイナーレ85に対するJDFの高い評価と、そのことによって生れた新たな連帯感、組織として初めてこれに取り組んだUSD-Oの大きな成果には違いないし、これを足がかりに次のステップを目指した「デザイナーレの基本構想 以下85年構想」が起草されたのもこの時だが、その後の経過をふり返るならば、この目論見とはウラハラな認識が、もはやデザイナーたちの大勢を占めつつあったと言ってもよい。

それは、新たなプロモーションへの発展よりも、交流イベントに対する企画と演出の内容が、大阪デザイン界のアピールそのものであるかのような思い込みであり、そしてそのことに対する新たな批判が、デザイナーたちの間にまたしても燻りはじめるという、きわめて不本意な悪循環であった。たしかに、当時の多くのデザイナーたちが、国際デザインフェスティバルを大阪デザイン界

には他人事の「天下り行事」と見ていたことも事実なのだから、仮にデザイナーレの目的をこの行事のホスピタリティに限定したとすれば、たとえ85年の成功がそうであったにせよ、開催のエネルギーをデザイナー側が提供する必然性はその根拠を失うかもしれないのである。

こうした局面の転換を図る意味を含めて、この行事を舞台に大阪デザイン界をアピールするデザイナーレの前進を、言い換えれば85年構想のひとつの試みとして、USD-Oが過重な負担を承知の上で取り組んだのが89年の「大阪の活力とデザイン展」であった。

#### ◆大阪の活力とデザイン展

デザイナーレ89における「大阪の活力とデザイン展」(第4回国際デザイン展特別出展・主催は大阪府・大阪市・ODC・USD-Oが構成する同展運営委員会)の開催は、85年構想のいわばシミュレーションとも言えようし、少なくともその展開へのきっかけにひとつになるかとも思えたのだが、しかし、結果的にはデザイナーレ89の実績として次の段階に生かされることもなく、この事業に対する一般的な評価は、むしろデザイナーレとは別格な特例行事の扱いであった。

このことは、デザイナーレへの平均的な理解が、この時すでに国際デザイン展のホスピタリティ行事として半ば定着しつつあった事実の裏付けとも言えようか。

大阪市制100周年記念事業のひとつであるこの企画をUSD-Oに持ち込んだ大阪市に、これをデザイナーレに含まれる一イベントと位置づける理解がなかったのも当然だが、大阪にとって意義深いこの事業をプログラムに加えることは、大阪デザイン界への刺激と共に85年構想の一步前進を目指すデザイナーレには、またとない好機となるはずであった。

実際には、この協力要請を受けて立ったUSD-O会員各団体の思惑が、必ずしもデザイナーレへのこだわりではなく、そのことよりも、この事業のテーマ性と、それに対するUSD-Oの大阪デザイン界における立場への自覚が優先する決断と言えようが、団体間の意欲の格差や分担金の財源確保などに問題を残したものの、総力をあげてこの事業に取り組んだUSD-Oの業績は大きく評価されてもよい。

この成果がデザイナーレへの新たな認識に直結しなかったことは前述の通りだが、もうひとつの誤算をあげれば、USD-O 側の主張した JDF・ODC・USD-O の三者体制に大阪府・市を加えた [デザイナーレ大阪コミッティ] を事業主体とする提案が、行政側のタテマエ上、実現しなかったことであろうか。たしかに形式上の範囲であり実質的な障害ではなかったとは言え、デリケートなイメージの差異がデザイナーレへの理解に全く無関係とは思えないのである。

#### ◆見直しの機会を与えられた 93 年以後

「大阪の活力とデザイン展」の開催を 89 年にはさんで、前出の記念講演会と交流イベントによる二部構成のスタイルは、デザイナーレ 85 から 91 まで 4 回続いたのだが、93 年第 6 回国際デザインフェスティバルを前に、JDF が USD-O への事前の通告もなく、記念講演会の単独開催を決定したことに始まって、デザイナーレは幸か不幸かその見直しを迫まれることになる。

もともとこの記念講演会は、表彰式とセットされた国際デザインアワード事業の公式行事だから、JDF が 10 年目にして初めて本来の形式を整えたと言えそうとも言えるのだが、しかし、1983 年に遡れば、アワード受賞者ではなくコンペティション大賞受賞者の記念講演を、ODC への委託事業として外部で開催した前例を踏襲したデザイナーレのプログラミングには、JDF を含めたコミッティが主催する形式上も不備はない。

このことだけではなく、93 年に入って一変した JDF のデザイナーレに対する扱いは、例えば正式な開催依頼もなく、しかも、国際デザイン展に関連する各種行事の空白の一日を、単にデザイン団体用として割り当てるという一方的なスケジュール設定もそうであった。

これらの背景には、主要幹部の交代に伴って、デザイナーレへの認識や、デザイナー側の意向に対する理解が大きく変化した JDF 内部に、コミッティへの解釈を含めて誤解に満ちたタテマエ論が、突如として復活したとも言えようか。デザイナーレの成立や両者間の微妙な推移を無視した JDF のこうした一連の動きが、デザイナー側の意欲に影響を与えなかったとは思えないのだが、しかし、その一方に 5 回の経験を重ねてなお、デザイナーレの位

置や性格を明確に打ち出せなかったデザイナー側の姿勢にも大きな原因を認めなくてはなるまい。この時点では継続することのみ、最終的な目標への道を僅かに残されたデザイナーレが、10 年目にして迎えた大きな転機とも言えるのだが、このことは同時に、視点を変えたデザイナーレの新たな道を選択する好機だったかも知れないのである。

### 第 3 章 一過性のホスピタリティか 永続するプロモーションメディアか

#### ◆あらためてデザイナーレの基本構想について

デザイナーレの基本構想は、前章で少しふれたようにデザイナーレ 85 の終了後、今後の発展を期待した USD-O 内部で発表されたものだが、時期尚早を理由に保留されたまま外部に呼びかける適切な機会を逸した理由はその内容よりも現実の展開とのギャップであった。

あらためてこの構想をほぼ原文のまま記載するが、具体的な内容の是非はさておき、少なくとも行政関連事業に追従する奉仕的作業とは異質なデザイナーレの発想が読みとれるはずである。

#### ————— [デザイナーレの基本構想] —————

#### ◆基本理念

1983 年秋、大阪 21 世紀計画の幕開けと共に、大阪は新しい道を歩み始めた。それは国際交流を前提とした活発な経済活動と文化の繁栄を両輪とする豊かな都市環境の創造を目指す長期構想の推進であり、単に大阪の産業、文化全般の停滞に対する一過性の刺激に止まるものではない。(中略)

新たな時代を前に、国際経済文化都市の構築を標榜する大阪にとっては、国際デザインフェスティバルを中核とするデザインの集積と展開が、都市環境において、経済活動において、あるいは文化振興において、そしてまたそれらを生き生きと結び横糸として、この上なく重要な役割を担う拠点となることは言うまでもない。

かつて大阪には「煙の都」と呼ばれた古典的な産業都市の旗印があった。やがて大阪の経済と文化はデザインに

よって有機的に連繋し、大阪が「世界のデザイン都市」とうたわれる日も決して夢ではない。そして、それが明日の大阪の人々への、またとない魅力的な贈りものになることを、高らかに首唱しようと思う。

#### ◆基本計画

デザイナーレは既に海外から高い評価を得つつある国際デザインフェスティバルをメインイベントとしさまざまなデザイン関連行事を包含する「大阪デザイン月間」の総称であり、デザインによる新しい大阪の創造を目指す多目的なプログラムである。

1) デザイナーレ大阪コミッティ (D・O・C) の設立  
デザイナーレの総合的構想の実施のため、準備・研究および事業の推進に当たる D・O・C を設立する。D・O・C は財団法人国際デザイン交流協会、財団法人大阪デザインセンター、大阪デザイン団体連合の三者によって構成し、他に行政機関、個別企業などの協賛参加を求める。

2) 基本プログラムの構想

- ・国際デザインフェスティバルを中核とする。
- ・総合的なデザイン関連行事の開催要請を行う。
- ・各デザイン団体における活動を促進し、中心的・継続的行事の開催要請を行う。
- ・住民・行政・産業とデザイン関係者を一体とするデザインフェイト 例えはデザイナーレ前夜祭、オリジナルデザインバザール等を D・O・C 主体によって開催する。
- ・大阪の都市環境、生活環境、地域振興へのデザイン貢献者に対する《DESIGN OSAKA AWARD》を制定する。(中略)

3) デザイナーレの推進

D・O・C は特定の機関・団体・企業等による事業に対しては積極的に協力し、同時に D・O・C 主体による事業との連携・調整のもとに、デザイナーレ全体の推進をはかる。  
(1985年12月起草)

#### ◆デザイナーレの道

前章に記した第2回以降のデザイナーレをめぐる諸々の現象を振り返るまでもなく、回を重ねることによってデザイナーたちの意識と意欲の高まりを期待した発起人有志の目論見は、コミッティの編成を除いて悉く裏目に出たと言ってもよいのだが、この誤算は、例えば85年構想の是非を問う機会すらなかったようにプロモーション活動の基盤となる理念の共有に対する不作為以外に理由はない。したがってもし、発展的な継続を望むとすれば、今後デザイナーレの目指す方向には、次にあげる三つの展開が考えられようが、いずれの場合にも共通する最大事が、デザイナーたちの、とりわけ USD-O 内部でのデザイナーレに対する認識と姿勢を、可能な限り均質化する作業であることに違いはない。

#### 1) 漸進的展開へのシフト

過去7回の経験と反省を基に、社会的影響力を備えたプロモーションへの漸進的拡大を図る展開を、その第一にあげるべきであろうが、JDF、USD-O それぞれの思惑の両立を前提とする現状の構成には、これまでがそうであったように、ややもすれば時々の情勢に左右される脆弱な体質が、一貫性のあるプロモーションとしての性格を打ち出し難い決定的な死角を持っている。

発足以来しばしば指摘されたデザイナーレの不透明な部分とは、まさしくこのことを指しているのだが、その意味で、85年から91年まで後援団体の筆頭に名を連ねた財団法人大阪21世紀協会が、95年度の後援名義を辞退する理由にあげた「国際デザイン展の内部的イベントの性格が強く、当協会後援の対象となる独立した文化事業とは認め難い」という見解がこの危惧を裏付けている。

少なくともデザイナーレ95に関する限り、国際デザイン展におけるホスピタリティに並立するデザイナー側の意思表示が、他ならぬ阪神大震災を念頭においた自粛姿勢とその支援に集中していたのだから、交流イベントの現象的な効果以上を求めたわけではない。しかし、デザイナーレ一回分のエネルギーを神戸支援に提供した USD-O の選択は決して誤りではないし、その意志が目標に向う長い道程の一プロセスとして無意味に終るとも思わないのだが、大方の見方はそうではなく、国際デザインフェ

スティバルに含まれる一部分としての評価でしかなかったのである。

このことは、デザイナーレの現状に対する一般的な印象を代表する直接的かつ現実的な指摘であり、同時にその限界を暗示する教訓と言えはしないか。前例に従った単なる継続から、発展的展開への実質的なシフトを試みるには最も困難な道と言えるのかも知れない。

## 2) 主体を共有するホスピタリティ

第一にあげた現状をふまえた二つ目の道は、これまでの発想と視点をいったん白紙に戻して、改めて国際デザインフェスティバルにおける成熟したホスピタリティの完成を目指す展開である。

ここまで述べてきた論旨とは矛盾するようだが、80年代との比較において国際デザインフェスティバルやその関連諸行事と、デザイナーたちとの間に明らかに兆しつつある一体感の、さらに建設的な成長の予測がこの考え方を正当化する。

過去10余年にわたって、大阪を発信地とする国際的デザイン情報源として機能するこの行事を、これまでのような他人事ではなく、自らの将来的利害と直結する貴重な資源として、日常活動の延長上に位置づける共通認識が成立するならば、主催者(JDF)の性格、国家的見地などのタテマエ論を越えた確かな連帯によって、この国際行事の蓄積された成果を大阪と大阪の人々の間に定着させる目標の、そのすべてではないにせよ、少なくとも大阪のデザイナーたちには、ほぼ同等同質の価値が約束されるはずである。このことを前提とするデザイナーレには、単にJDFの要望に応えるためではなく、ホスピタリティの主体を共にする大きな意味と効果を期待できるのである。ただしこの道には、多くのデザイナーが忌避する行政関連事業への奉仕的協力活動と、現象的にはさほどの差異の見られない難所がある。したがって、この選択には、目に見えぬその成果を正しく理解し評価する良識と勇気が要る。

## 3) 85年構想のリバース

そして最後のひとつは、振り出しに戻って85年構想に示された全大阪を視野に入れた総合的なデザインプロモーションへの挑戦だが、その具体的な計画はともかくと

して、もはやデザインに対するかつての熱気が大阪から過ぎ去ったいま、行政・産業界・あるいは各種市民組織を含めた全面的な支持と、強力な体制づくりの実現をデザイナーたちに期待してよいものか。

もとよりそれは、ひとりデザイナー社会の働きに委ねられる範囲ではないと言えそうなのだが、継続的な自助努力の上こそ、他動的な誘因による刺激と変化が、新たな状況を開発する相乗効果を生み、社会を動かすエネルギーともなり得るのだから、例えば、他ならぬ国際デザインフェスティバルの誘致運動に見られた大阪官財界のデザインに対するかつてない関心の高まりを無作為に見逃したように、デザイナーたちの地域デザイン環境に対する日常的無関心や、おそらく無意識な社会的依存体質が、デザイナー社会における公共活動の成熟を妨げているように思えるのである。

終わりにODC発行の「情報」誌(104号)に掲載されたデザイナーレ95レポートを再録しておく。

## 「改めてデザイナーレの意味を」

### ◆一過性のホスピタリティか永続するメディアか

1.17災害への支援を機軸としたデザイナーレ95は、国際デザイン展やアジア太平洋デザイン交流会議における国際交流を背景に、10月9日盛況のうちに幕を閉じた。この企画は、大阪デザイン団体連合各団体代表たちの慎重な討論の成果だから現時点でのこの催しに対するデザイナー側の結論とも言えるのだが、12年を経過したいま、デザイナーレの意味をあらためて問う前に、過去7回の国際デザインフェスティバルが大阪にもたらした効果と、これを誘致した当初の目的とのバランスをひとまず確認する必要があるはしないか。

この行事に含まれる三つの事業のうち、国際デザインアワードと同コンペは、本来地域性とは無縁だが、継続する一定の評価が、国際社会における大阪の知名度を高めたとすれば、既に投資(目的)を上回る開催地メリットと言えなくはない。しかし、それだけではなく大阪の誘致目標は明らかに三つめの事業である国際デザイン展を指していたはずである。翻って80年代

を前に深刻な貿易摩擦や、経済の構造的変革を追って産業政策の文化的展開を図った通産省の国家的見地と、新たな国際経済文化都市建設への布石として、この事業の波及効果に期待した大阪の地域性との微妙なずれとその作用が、その後の展開を左右したのだが、大阪の期待が80年代初頭とはもはや同質ではあり得ないにせよ、かつてはこの事業を中核イベントと目した大阪21世紀計画における現在の位置づけを見るまでもなく、当時の行政と財界をあげたデザインへの関心の高まりを人々の間に定着させるための手続きに手抜きはなかったか。

通産省がこの事業にかけた「デザインを通じたわが国産業の文化的貢献を世界にアピールする」目的と共に、もうひとつの「国民のデザイン認識の向上によって内需拡大を刺激する」狙いが、国際デザイン展の成果に委ねられているとすれば、単に大がかりな業界行事という現状の人々の印象は、この目論見に対する効果的な解答とは思えないのである。

その意味で、大阪のデザイン史上最大のこの行事と大阪の人々とを結ぶ接点の拡大は、言い代えれば大阪が、かねて待望したこの国際的文化情報源を、デザイナーを含めた大阪の人々の共有する貴重な資源として有効に活用する試みは、国家的見地のタテマエがどうであれ、この事業の開催を買って出た大阪が、自らの手で用意しなければならないのかもしれない。まだその機会を失ったわけではないのだから、このことをデザイナーレの今後に期待してはいけないのだろうか。

それはデザイナーレに対して、国際デザインフェスティバルにおける一過性のホスピタリティか、あるいは「地域社会とデザイン」をテーマとした永続するプロモーションメディアかの、きわめて現実的な選択を迫ることになるのだが、あえて言うならば明日の大阪のデザイナーたちに託された夢は、そのいずれかではなく、このふたつの両立に他ならないのである。

### デザイナーレのあゆみ（1983～1995）

デザイナーレ 83—大阪城ホール／450人

- ・公開座談会、各種イベント

デザイナーレ 85—インテックス大阪／1000人

- ・記念講演会、交歓パーティ

デザイナーレ 87

—インテックス大阪・ルミナス神戸／650人

- ・記念講演会、大阪湾上交歓パーティ

デザイナーレ 89—インテックス大阪／750人

- ・記念講演会、交歓パーティ

- ・大阪の活力とデザイン展

（大阪府・市・ODC・USD-O 共催）

デザイナーレ 91「大阪ビジネスパーク」／500人

- ・記念講演会、10周年記念交歓会

デザイナーレ 93—花博記念公園／一般参加

- ・風の縁日（テーマ作品展示&パフォーマンス）

デザイナーレ 95—ATC スカイアトリウム／450人

- ・神戸支援チャリティイベント、交歓パーティ